
アルファケンタウリの風

紅碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルファケンタウリの風

【Nコード】

N8273Y

【作者名】

紅碧

【あらすじ】

アルファケンタウリに新婚旅行にかけたブラックは、ある異変に気づき、極秘任務を、木星流刑地勤務のレオンハルトに依頼する。

西暦3087・6・7

―ちょっと待て

ぐいつと後ろに引つ張られ、彼女は振り返った。

―そんなに急ぐと危ないぞ

ゲートは開いていた。

―大丈夫 ゆっくり行きなさい

時間はまだある

ぶつかって怪我でもしたら馬鹿馬鹿しい

ブラックは通路内のベルト上でほら、と左手を差し出した。サウスポーの彼の手を握ると右手に思いが伝わってくる。

―愛しているから。

―うん、私も。あなただけ。これからもずっとあなただけを想う一生。

二人はそのまま、移動通路で緑色の観光宇宙船の入り口に移動していった。ハネムーンはこれからなのだ。

妻は舷窓から宇宙空間を見詰めた。青藍の海に銀色の星たちの煌めきが目に染みる。地球は遙か後方に遠ざかっていく。

この宇宙船は夫が設計した船だった。太陽系連合下の宇宙観光船事業で、客足も結構いい。太陽系内惑星を観光遊覧して1周するコースだった。

脇で、身体を沈める座席を何回もカチャカチャいわせてリクライニングさせて遊んでいた夫が宇宙新聞を読みながら、心に入り込んできた。

―太陽系を観光遊覧し終わってからアルファケンタウリに立ち寄ろうか。

― いいね。

妻は嬉しくなった。

― 二人だけで小型宇宙艇で。

― うん。

彼女は大きなエメラルドの瞳を輝かせた。

― ありがとう、あなた。

座席は全て、他の客同士見えないよう個室かされ視覚的にはプライバシーは守られている。二人は身体を寄せ、抱き締めあい、口付けした。男の鼓動を聞きながら彼女は静かに目を閉じた。

― 眠いのか？

男が聞いた。

― うん。

彼女は守られている幸せを感じ、ゆりかごの中で眠る感覚に心を預けるのだった。

アルファケンタウリの砂嵐は数日間続いた。薔薇色に煙る砂塵が舞い上がる。やがて砂塵は穏やかな淡いアメジストの雨へと変わっていった。優しくうすむらさきに煙る雨が降りしきる午後。店は開いていたことが気付かず素通りされるほど目立たなかった。

「いらつしやい」

カウンターの20そこそこの店長らしき、青年がにこやかに出迎えた。

「何にいたしますか？」

深めのシルクハット姿のダークスーツの紳士が「サンドイッチセツトを二人分」と注文して「いいね？」と連れの淡い菜の花色のスーツの女性に囁いた。男の年は30才前後、スラリと背が高く漆黒の長めの前髪に、切れ長の青みがかかった瑠璃の双眸が印象的だ。小柄なほっそりとした女性は抜けるような白い肌に大きな緑の瞳、肩にふりかかる銀の髪の毛、まだ16、7の少女だった。

「お客さんたち、内地からみえたんですか？」

カウンターではなく、奥の窓際のボックスにいる二人に尋ねると、
「そうです」と女性が答えた。「内地のどこ？」と聞かれ、答えようとした少女の右手を左掌でぐつと押さえ、だめだというように男が制した。

「太陽系から来ました」と彼は無愛想に答え、店員からサンドイッチセットと飲み物を受け取り、「食べよう」と連れに促した。にこっと笑うと少女はオレンジジュースを飲みながら「おいしい、ありがとう、あなた」と囁いた。あなたは、ということは、二人は夫婦らしい。どうみても親子？だが。

少女の右手にしたエメラルドを嵌め込めたブレスレットと揃いのものを男も左手首に着けていた。

軽食を済ませた二人は特に会話もなく、料金を払うと、「この惑星の太陽はいくつですか？」と男に聞かれ、店主は「2つですが」と答えた。「そうですか？」と男は会釈して、「ごちそうさま」と立ち去る寸前、左掌を掲げた。手首の銀色のブレスレットに嵌め込めた青紫の宝石が煌めき、一瞬、固まった彼を残して、夫婦は店外へ出ていった。

―記憶消したの？

―ああ。

―役に立たなかったから？

―いや、彼自身に被害が降りかからないようにするためだ。
外に出るとかれらは駐艇場にある小型宇宙艇に向かった。

―ホテルが衛星にある。知り合いが支配人だから安心して泊まれる。
今日はもう遅いから明日、観光しようね。

―探すのも明日ね。

―まあ、そうだね。

―見つかるのかしら。

―きつと見つかる。ごめんね。せつかくの旅行なのに。

―いいのよ。

なくなつた1つの太陽はどこに消えたのか

確か空間の境目は閉じたはずなのに。

―少し休もう。

彼が呟いた。

―そうね。明日のことは明日考えましょう。

本当は3つあるはずの3重連星の太陽を想い、夜空を見詰めた。宵闇が黒檀の墨を流したような深い夜が空を覆っている。

雨はいつの間にか止んでいた。疾風が二人の脇を通りすぎていった。二人は小型宇宙艇に乗った。紺青の海に時折煌めく、星の瞬きが記憶に刻まれ、残った。

西暦3087年12月 木星首都ジュピター207

―期待はしてなかったがやはり、ひどいところだ。

復帰後に派遣された勤務地は、流刑地木星であった。

枯れた黄土の荒れ果てた砂地に眠るサイボーグたちの刑務地は、要塞ともいえる黒譚の大理石に覆われた城である。

広大な砂漠地帯に聳える、太陽系一のセキュリティを誇るこの地から、かつて脱出を試みた者は数多くいたが、完璧に成功した者は、まだ誰もいない。

その夜、所長と副所長と対面し、挨拶と前教官との引き継ぎ済ませた、もと太陽系連合軍所属レオンハルト少佐は、紅のスペーススーツのまま、宇宙船から派遣先の仮の住処へと入った。城の入り口で、証文を掌で確認すると、ドアは自然と開き、ZERO-533の部屋へとベルトコンベアーで誘導された。

ZEROとは流刑者とは別棟の官吏の官舎名である。

少佐というのは名ばかりで、刑務所のサイボーグ、それも犬の方の、教官か。

この中で、さらに強制洗脳し、軍に送って危ない仕事をさせなければならぬ、
「モノになり、使える犬たち」を極秘に選ぶのが本来の仕事だ。彼らサイボーグ犬は、人間たちの手となり足となり、危険で汚い仕事をやらなければならない。

だが、表向きは、所長の下、服役中のサイボーグ犬の管理と統括が主な私の仕事なのだ。

―私はやはり、人間扱いされていない。連合軍に。地球に。太陽系に。

彼らにとつて、たとえ人間の脳を持っていると明確にされたからといって、今更、（サイボーグ）犬で生きてきた私を、同等にみることはできないのだろう、きっと。

暗澹たる鬱屈した思いと、忘れてしまいたい過去の恋を思い出し、彼は自分の感情を振り切った。

すべての「激情」は切り捨てたはずだった。

カーテンや壁紙などのコーディネートはキャメルとモスグリーン。簡素な部屋で、トレーニング用のジムのマシン一式と、テーブルと椅子、ベッドしかない。キッチンはなく、サイボーグ用の燃料「食事は屋外のレストルームで用意されるらしい。

実際の勤務は明日からとなっていた。少しの休憩を取り、脳を休め燃料補給し身機体のメンテナンスのため、レオンハルト「レオンは、緋色のスーツをハンガーにかけ、シャワールームへと消えた。

トレーニングウェアに着替え、ジムマシンで走っているレオンに呼び出しがかかる。

「レオンハルト教官、R81に来てください。囚人が脱走しました」「囚人？」

「服役中のサイボーグ犬の脱走です」

彼は左手のアレキサンドライトの埋め込まれたブレスレットの通信モニターから3D画像を、確認すると、

「ふーん」

と感心したように呟き、「わかった、今行く」と、部下に告げた。モニターに映し出された投身大のサイボーグは完璧とも言えるバランスのとれたボディート、緋色の瞳と薔薇色の長い髪を持つ、透明で白い肌の美少女だった。

名は、ルビーという。外見年令は17才。犬に変身するときは、、、、スピッツか。

サイボーグ犬店つでセクサロイドとして働いていた店の従業員と、金持ちの客を強盗殺人して金を奪って駆け落ちした罪で、服役中2ヶ月目だ。

従業員はつかまったその場で、発砲してきたので、連合警察に射殺され、人間のサイボーグに改造され、木星の別棟で、同じく服役中の、、ブランカか。記憶操作されているから、たぶん、ルビーのことは覚えてはいない。

レオンは再び、紅のスーツに着替えながら、複雑な思いでいた。スピッツ犬の脳を持つサイボーグが、人間の男と恋をして、別の人間を強盗殺人し、その金を奪って駆け落ち逃走する。

それは、はたして、現実に、ありえることだろうか？

私は、ドーベルマン犬だと思い込んでいたが、実は人間の脳を持つサイボーグで、仕えていた御主人様の妻に恋をしていた。

犬ごときの自分が人間に恋するなど、ありえないと思い続けていたが、私の場合は、もと、人間だったから、納得できる。

ルビーに会ってみたいものだ。

金色の美しい髪をなびかせながらレオンは、囚人棟へと、走り、急いだ。

囚人棟 R 8 1

この要塞から逃げおおせた者はかつて1人もいない。

レオンはそう、太陽系連合軍から命じられてこの地に来た。

パネル上に、煌めきが波状にゆらめき動いていくのが見える。

生体反応センサーで、サイボーグは脳が生身なので、脱走してもすぐわかるのだ。

レオンは、脱走者のいるゲートを封鎖するよう、部下に指示し、そちらへと向かった。

目の前に緋色の花が現れた。鮮やかな薔薇の花弁が、微笑する。城の片隅の通路にうずくまる少女は髪と反映する純白のドレス姿だった。

「これは盗んだ服よ。隠し持っていたの」

少女は華麗な紅い薔薇のような深い瞳をこちらに向けた。それは激情的で燃え上がる炎が向こう側からこちらに燃え移るような錯覚を覚え、レオンは思わず眩暈した。

「どうする？私を罰するの？あなた、連合軍にいたレオンハルト少佐ね。私、銀河ネットワークで見たことあるわ。ジュニアの家のもと執事よね」

「今は木星流刑地所の犬型サイボーグの教官だ。君は脱走した罪で独房入りだな」

「人間の言うことなんか、私きかないわ」

「、、、たしかに私の脳は人間だが、外見は君と同じ、変身型サイボーグ犬だ」

「同じじゃないわ。わたしたちとは、べつものよ」

その拒絶した紅い双眸に、レオンはある人と同じものを視たような気がした。

何者をも寄せ付けない、あの高貴な瞳を。

どこか思い出させる情熱の激流が、胸の奥から湧きあがる音を。

「、、、では、君の思考をいつとき遮断する」

レオンは左手のブレスレットをかざした。アレキサンドライトの紅い光が翡翠みどりに変わるとともに、少女の意識は途絶えた。

「きみは島流しのこの地に、何故配属されたと思う？」

70代くらいの白髪の所長は穏やかな人なつこい笑顔で尋ねてきた。

「私は島流しの地だとは思っていません」

「わしは年とつてるので仕方ないが、君のように優秀なサイボーグ

の若者が流刑地の監視役とは」

「理由は考えたこともありません。今までもそうでしたから」

所長、副所長ともに、レオンハルトを、製造後10年くらいの若いサイボーグだと思っている。外見年齢は25歳の眉目秀麗の琥珀の瞳の長いブロンドの美青年が、大型サイボーグに間違われて改造されている事実も知らされている。だが、明かすことはできないが、脳の実年齢では、レオンは40年近く前にサイボーグとして製造されたので、もしかすると、この老刑務所所長より少し若い、同年代くらいなのかもしれない。

写真で見た限り、人間だった頃の自分（25才くらいの青年？）と今は、外見がまるで違っていた。

現在、レオンの人間だった頃の記憶は、まだ戻ってはいない。もともと軍でも今と同じような極秘任務の部署だったし、通常勤務時はサイボーグ犬の姿だった。ハイト家の執事だった頃も。シルバーが来る約10年前までは、犬の姿でしか、外出したこともないし、人間の姿はごく限られた時間、屋敷内でブラックやロック・ハイトと過ごしたただけだ。シルバーが来てからは、その護衛として、火星の訓練所に送迎のため、人間の姿を、頻繁にメディアや、人目にさらすようになった。

（だから私は、公では25歳の青年としか思われていない。今のところは）

本来の仕事は、太陽系連合軍の極秘任務だった。仮の姿でレオンは微笑した。

「ありがとうございます。所長、でもそのようなお気づかいは無用です。私はサイボーグ犬として生きてきました。そのような感情は持ち合わせないように操作されています」

「鬼が島に配属されたようなものだ。わしが引退した後も君はここに留まることとなるのかな？」

「わかりません」

未来のことなど誰にもわかりはしない。なぜ、自分はこの太陽系1

のさいはての惑星ともいえる木星に配属されたのか。神「ジュピター」という名のこの惑星が、皮肉に思える。

「なにか理由があるのだろう。太陽系連合主席殿の思惑に」

「理由、、、ですか？」

「わたしには、なにも言えんが、君はなにか、この世界の未来の駒として、ここによこされたのではなかるうか」

「未来の駒」

「決して捨て駒じゃない。変える力があるということだよ。礎ともいえる」

「予言できるのですか？所長は」

「一応わしもエスパーのはしくれでな。未来がみえるだけで、それに直接、力をかすことはできん。きみ、しだいだな」

レオンは、予言ともいえる、老人の言葉にもしかしたら、希望がみえるかもしれないと感じた。人間からサイボーグになった自分含めた彼らの未来に。なにか、光がみえるのだとしたら。

「あの脱走したサイボーグ犬は独房かね？」

「はい」

「なぜ逃げだすのか、理由をきいてみてくれんか？あとは副所長に君の役目について事づけてある事項があるので、彼のところに寄つてから行くように」

「了解しました」

レオンは、相手が飲み終えたアールグレイティーの入ったウエツジウッドの美しいカップを下げ、奥へと消えた。

もとは優秀な軍人だが、執事としても素晴らしい。そつのない若者だ。

所長ジョナサンはゆたかな顎鬚を右手でなぜながら、他の所員たちの報告書に目を通し始めた。

ルビーの独房に行く前に、副所長に呼ばれたレオンは、彼の勤務室

に立ち寄った。副所長キース・ミハイロフは、彫の深い顔立ちのきつい目をしたロマンズグレーの40代のサイボーグエスパーだった。「アレクセイ・ジョナサン所長は、天下りだから、半分遊びで仕事してるような方だからね」

皮肉まじりの口調で、メタルフレームのサングラスの彼は、目の前のモニターを指差した。

「アルファケンタウリで、半年ほど前から、3つの太陽のうちの1つ赤色矮星プロキシマが消滅している事実は、君も知っているね？」
「存じてます」

「調査局長が、新婚旅行の帰路で調査してこられた調査書によると、この次元には存在しないらしい。また、アルファケンタウリの惑星と衛星の惑星市長含めて住人全員に、なんらかの記憶操作が施されているそうだ」

「記憶操作とは、彼らが疑問を持たないということですか？」

「そうだ。ある一定の記憶範囲だけ、つまりなくなった太陽の記憶だけをなくした集団と化している。調査局も調査中だが、理由がわからず、手を焼いているらしい」

レオンはキースが次の瞬間、予期せぬ指示を下したのに、仰天した。

「君にあの、靈感エスパーのサイボーグ犬の娘、ルビーを連れて、アルファケンタウリに出向してもらいたい」

「副所長、あの娘は犯罪者ですよ」

「わかってる。だが靈感能力を持つサイボーグのエスパーは、今のところあの個体しかないんだ。能力封じのブレスレットをつけさせて、特別に外出許可を出すことにする。これは極秘任務だ。軍と調査局から君の方にも指示がだされている」

「ご存じだったんですか？私が軍に命じられてここに来たことを」

「ジョナサン所長も私も、軍からあらかじめ伝えられて知っていた。実質的なこの所長は、私だがね」

モニターの片隅の太陽系連合秘密機構のZのマークと指示項目に目

をやり、

琥珀の大きな瞳にあらわにし困惑するレオンに、キースはメガネの奥の灰色の鋭い眼光を向けた。

「できるな？レオンハルト少佐」

レオンに、断る理由はみつからなかった。

「ブランカはどこ？」

最初に自分に投げつけられた言葉は彼女の恋人の所在だった。

「人間型サイボーグの刑務所にいる」

「どこなの？何棟？」

「教えられない。それに彼は記憶操作されて君のことは一切覚えていない」

ブランカはすぐれたヒットマンとして店主に雇われた用心棒だった。

「思い出させてみせるわ。だって私」

口に出さないその言葉をサイボーグエスパーのレオンはテレパシーで聞いた。

（あの人の心を記憶を支配できる）

「ブランカと一緒に連れていって。でないと行かない。あの人は銀河一のヒットマンよ。きつと役にたつわ」

「客を強盗殺人した張本人だぞ。君だって彼の助手だろう？」

「今そんなこと言える状態なのかしら？強盗殺人て言うけどあれは正当防衛よ。先に殺されかけたのは私なんだから。あれはストーカーだったの。これを見て」

ルビーはいきなり自分の囚人服を肌け胸を見せた。白い豊かなバストに十文字の生々しい傷痕が残ったのが痛々しい。

「ブランカがヒットしたのは私の前の飼い主なの。この傷はその男がつけた傷よ」

「何故、傷痕を残しておく？簡単に治せるだろう？」

「忘れないために」

「何を？」

「人間が私にしたことを」

「君は勘違いしている。ブランカもまた君を傷つけたやつと同じ人間なんだ。それに彼は明日処刑される。矯正不可能だったせいでね」

「処刑」

「記憶操作されて廃人になったそうさ。たまにそういう輩が出るんだよ」

「私なら治せる」

「無理だ。それにきみは犬なんだよ。ルビー、人間に恋してると思うのは大きな勘違いだ。きみはスピッツ」

「あなた、ドーベルマンよね」

「ああ。だが人間でもある。私は連合政府の手違いで死後サイボーグ化される際、サイボーグ犬用に廻されてしまった。つまり、まともなサイボーグではなく、狼男みたいなもんだ」

「人間」

「そうなんだ。ルビー、協力してくれ。君の力が必要なんだ」

そう言うところ、レオンはルビーの右手に紅い宝石のはめ込まれたプラチナ製の能力封じのブレスレットをつけた。そして肌蹴た彼女の白い囚人服を正した。

「こういうものを簡単に人目にさらしてはいけない」

「傷跡はみにくいものよね」

「そうじゃない。きみはとても美しいから、危険にさらされるからだよ」

レオンは、そう言うと、「じゃあ、一目だけブランカに合わせよう」と、彼女の手を取り立ち上がらせた。

「現実を見たら、私とアルファケンタウリ、目的地まできつと行く気になると思うがね」

「誰があなたなんかと」

ルビーはそっぽを向いた。

「きみがなんと言おうと、実質的な君の飼い主は、今からは、私だ。私は人間だからな」

そう言うと、憤怒の表情のルビーのとても美しい大きな紅い瞳を見つめ、抱きしめると口付けした。

「セクサロイドとしての機能は私も持ち合わせている。今夜ためしみよう」

ルビーは強靱な力に支配されたまま、身動きが取れずにいた。深い湖の底に沈む情熱は恐怖となり、彼女を覆い尽くし始めていた。

「個体の調教は成功したのか？」

軍の方から連絡がきたので、レオンはアルファケンタウリに極秘に向かう小型宇宙船の中で応対した。同じ連合軍の秘密機構のアルフレッド・シン大佐からだ。

「大丈夫です、シン大佐殿。確実に成功しています」

「了解した。では、アルファケンタウリで会おう」

簡易ベッドの脇で眠る、薔薇色の髪少女は失神した後、深い眠りの中にいる。

淡いライムグリーンの毛布にくるまり、安らかに眠るその貌は、とてもある人に似ていた。

忘れてしまいたいのは私の方なんだが。

飼主を恋人と思いつつけ、廃人と化したブランカという強面こわもてのもと、やくざのヒットマンに直面させた後、意気消沈したルビーを拘束し、無理やりこの宇宙船に乗せ、ここまで来た。

ルビーは拒むかと思いきや、そうではなかったのだ。

だが、。。。

次の飼主主に、簡単に犬はなつくものではないのだが。

レオンは、内心、困惑しながらも、事を成してしまった後、深く後悔した。

あまりにも無邪気で素直すぎる。

ここまでですんなり自分を受け入れられては、私の精神の方が、壊れてしまうのではないか？なぜならルビーの貌とその肢体は、あまりにも、あの方の面影に、似すぎている。

そつとレオンは彼女の透明な胸についた傷跡に唇をよせた。そしてやさしくキスをし、ささやいた。こんどは私が守ってあげよう、ブランカの代わりに。自動操縦中の舷窓からさしこむ星明りと、碧く董色にとけこむ深い宇宙のそらだけが、二人を見守っているかのごとく、沈黙の海へと意識を閉ざしていた。

ケンタウルス座アルファ星第3惑星ソラ051

青い朝日の差し込む中。宇宙船を海辺に停めたレオンは、携帯ビスケットとジューズ型燃料用食糧を、ルビーとともに摂っていたが、「少佐、実は私、昨夜のことなんですけど、初めてだったんです」と言っのをきき、ブホツと飲み物を、おもわずむせてしまったのだった。

「初めて、とは、どういう意味だね？」

「人間と、は、初めて、という意味です」

「君の2人の飼い主や、店の客たちとは、じゃ、そういう「ことは、なかったという意味か？」

「犬だった頃の記憶がないんですけど、私、もとはブリーダー犬だったそうです。死んでからサイボーグ犬に再生されてから2カ月間最初の飼い主のところでシェットランドコリーの番として飼われていたのですが、どうしてもその相手を拒み、飼い主のいうことをきかない私は何度も生命の危機に陥るほどの傷を負われました。逃げ込んだあの店には2カ月間しかいませんでした。店にはいろいろなサイボーグ犬たちがいました。そういう犬たち同士のセックスを客たちは見て楽しむ、そういう店だったんです。犬とそういう行為をする目的の人間はもっと別の店に行きます。でも店でもそういう行為がいやで、私はヒットマンのブランカに陰で飼われていました。ブランカはスピッツ犬が好きだったんです。彼は純粋に犬として扱ってくれました」

「で、もとの飼い主がおいかけてきたと？」

「ブランカはどういう形であれ、私を守ってくれました。すばらしい飼い主でした。でも、」

ルビーは困惑した表情になりうつむいた。

「私、自分がどうしても犬だったって思えないんです。ブランカに愛情というかそういう感情は持てませんでした。ただ、自分を保護してくれる父のような存在、」
「だっと思ったんです」

「君がどう思おうとかまわんがね。どちらにしても君はブランカと共謀でもとの飼い主を殺害した。その事実が変わらん。今度の任務が終わったら、またジューピターの独房いりだろうね」

「、、、わかつてます」

「覚悟があるかい？」

「覚悟？」

「命を捨ててもいい覚悟だよ」

「、、、そうしなければ少佐とはいられないということですか」

「この惑星は半分死んでいる状態だ。さきほど着陸したララ457軍事基地で面会したシン大佐は、記憶を半分失っていた。直属の上司のアズブル中佐は、空間の歪に3日前に2船団とともに消えてしまっている。追ってが私たちをみつけるのは時間の問題だろう。つまり、誰かの命を奪ってでも、あるいは、任務を果たすために自分の命までも捨て去ることができるか？という意味だ。現実には、私たちは2人きりしか味方はいない。極秘任務とは、そういうことだ」

「私はあなたについていきます」

「第2衛星エリスに天久保博士がいる。まず、そこへ行こう」

レオンは、ルビーをうながし、副操縦席に座らせた。

「わたしたちの行動、結果によってきみは無罪になるかもしれない。がんばろう」

「レオンハルト少佐、1つだけ教えてください」

「なんだね？」

「少佐はなぜ、私の調教の際、規則通り、犬に変身しなかったのですか？」

「私はきみのなかに、ひと、を感じた。きみは、もしかしたら人間なのかもしれない」

「人間？」

「きみに、わたしとおなじものを感じたからだ」

それをもしかしたら、ひとは、愛とよぶものなのかもしれない。

ケンタウルス座アルファ星・衛星エリス 桜ロード386

天久保博士は体格のいい、50代の豊かな肩まで伸びた白髪白衣の紳士だった。メガネの奥の黒い瞳がやさしい。サイボーグとエスパーの研究の第一人者で、軍事用サイボーグ開発研究でも有名な人物でその功績は大きい。

衛星エリスにはプリンセスホテルという大型ホテルがあり、太陽系連合主席のジュニアの古来の友人でエスパーの、カスガ氏が支配人だときく。

レオンとルビーは、夫婦という名目で、そのホテルに今夜は宿泊する手はずになっていた。ジュニアからさきほど連絡が入っていたからだ。

ホテルの駐宇宙船場に戦闘型宇宙船を置き、二人はこっそり裏口からチェックインし、カスガ氏と挨拶をすませると、そこから5分ほどの桜通り沿いにある、白い天久保研究所へと、覆面エアクリーで向かった。

天久保博士は自らがサイボーグエスパーでもある。

「プロキシマ・ケンタウリの赤色矮星が消滅してから、この衛星も第3惑星ソラ051もおかしくなった。君たちサイボーグやエスパー、アンドロイドなどのロボットはなんの支障もないのだが、純粋な人間だけが集団催眠暗示にかかったように、その部分の記憶だけ失っている。また、彼らはほとんどん身体を失い消滅し始めている」

「消滅？」

いぶかしむレオンに博士は

「どうも、別の次元に消えているようだ」と困り果てた表情を浮かべた。

ハリー・アズナブル中佐が3日前、突然現れた、宇宙空間の亀裂に出向いたが、彼が率いる軍の調査船2船団とともに、歪に落ち込み姿を消した。それが、ここエリスの上空だという。

「サイボーグに犬の脳を利用する方法は、まだ軍の下で極秘に行われているそうだが、きみたちはそうなのだね？」

「私はドーベルマンで、この娘はスピッツ。実はわたしの脳は人間だそうです。主席自らから、手違いの失敗品だったと明かされました。人間だった記憶は戻らないのですがね」

「人間の倫理に反することだね。それはひどい。太陽系連合政府に訴訟をおこしてもいいくらいだよ」

「その前にきつと抹殺されてしまうでしょう」

「その娘は？」

「表向きは私の妻ということで同行してます。犬のときの記憶が全くないそうです。数少ない、靈感を使えるエスパーで、きつと集団催眠された人々の暗示を解くことができるでしょう」

「きみ、名前は？」

「ルビーです」

真紅の大きな瞳に縁取られた瞳の、美しい少女に博士は、

「きみ、ひよつとしたら、犬ではなくて、、」

そう言ったとたん、あつという表情になり、博士は口を閉ざした。

「、、、天久保博士？」

いぶかしむレオンとルビーに、博士は白衣の襟を正し、

「ジュニア殿から、これを言付かっている」

と1枚のメディアファイルを手渡した。

プリンセスホテルの12階503号室で、二人は燃料を見た目はステーキセットとワインの夕食を摂り、シャワーした後、天久保博士から受け取ったファイルを開けた。

目の前のモニターに、10人の男女のプロフィールと所在が記されている。

「ジュニア殿に私たちはこの人物たちの記憶をさぐり、軍に引き渡すように指示されている」

男女の年令、人種、類別は様々だった。サイボーグ、人間、サイボーグ犬、ロボット、アンドロイド、エスパー、サイボーグエスパー、天使族、などだ。

「私はどうなるのですか？この任務が終わったら、もう、少佐とは会えないのですか？」

「、、、わからない」

背後から抱きしめたレオンに、ルビーが、囁いた。

「私、離れたくありません、少佐と」

「、、、私もだよ」

やさしく降り注ぐ淡いライムライトの灯りの下。

レオンはルビーの可憐な薔薇を指先で奏でた。

深い宵闇が、二人に訪れようとしていた。

「久しぶりだな、レオン」

翌朝、左手のブレスレットから、聞きなれた声が聞こえてきた。思わず、3D映像に映し出された人影に、レオンは身を正した。

「だんなさま、申し訳ございません」

「、、、もう、おまえの主人じゃないし、おまえは、俺の執事でもない。ずいぶんとかわいい犬を飼ってるじゃないか」

ルビーはスピッツ犬姿に変身していた。他の人と会う時は、なるべくそうしているようにと、レオンが指示したのだ。しっぱを振って愛嬌をふりまいている。

「サイボーグ犬、ルビーです。靈感も持つエスパーだそうですが」

「ふうん。おまえの番の相手か。スピッツとはまたずいぶんと、ミニサイズを選んだな。おまえ、壊さないようにしろよ」

「、、、どういう意味ですか、それは」

ブラックは不機嫌そうに、ワインレッドのスーツに着替えるレオンに、

「調査局から俺は今のところ動けん。今朝、別の人物をそちらに送りこんだから、協力して、あの10人を軍に引き渡してほしい」

「どなたですか？」

「バラード・レインだ」

レオンはホテルの窓から飛び降りたくなった。

「、、、あの方ですか？」

「、、、そうだ。おまえのもっとも嫌いなタイプの、素行の悪い不良少年だ。だが、腕はいいぞ」

「、、、了解いたしました」

ハイト局長は、瑠璃色の切れあがった瞳を、二人に向け、

「では、グッドラック」と言い残し、掻き消えた。

レオンは消えた壁に向かい、「二度と来るな」と吐き捨てるように呟いた。

「少佐らしくない言葉ですね」

ルビーは少女の姿に戻り、寄り添うようにして、レオンを見上げた。

「あの方は苦手なのだ。昔から」

「あなたにも苦手な方がいるのね」

ルビーは純白のフリルのついたミニスカートドレスを着ていた。言葉使いが敬語から、少しだけタメ口に変わっていた。

もう少し親しくなりたいから。

言葉ではなく思考で送ると、いいけど、と返事が返ってきた。ルビーはとても嬉しくなった。

「少佐、お願いがあるんですけど」

「なんだね？」

「この任務が無事に終わったら、きちんとした私の飼い主になってほしいんです」

「私もとてもきみが犬だとは思えない。飼い主でなくて、亭主ではダメか？」

「私、人間ではありません」

「いや、人間だよ。私が言うんだから、間違いない」

「ありがとうございます、レオンハルト少佐」

一見、とても矛盾した会話だが、レオンはかつての自分を思い出し、人間とは何を基準で皆、己たちのことを信ずるのだろうと考えた。結局は2人しかないのだ。レオンはそう悟った。

ブルートパーズ・青い薔薇

「生身の人間の客人たちに、連合政府から昨日届けられたガード機能のついた部屋とプレスレットを配布してください。あなたが、純人間でなくエスパーでよかった」

「私もです。お二人とも御無事で。任務が終わられましたら、ぜひ、ここで、式をあげられてしかがでしよう？」

「、、、、はっ？」

「ハイト氏から、ことづかっております。お二人は、式はまだあげられてないと」

レオンは、ルビーと顔を見合わせ、うろたえた。

「、、、、公でなければいいです。地味に、であれば」

「5月か6月頃には、毎年、桜ロード（桜通り）が満開になります。綺麗な教会もございますから」

30歳前後のアジア系紳士支配人のカスガ氏とのあいさつもそこそこに駐船場に來た2人は、啞然とした。

「遅かったか」

戦闘宇宙船は霞のごとく消え去っていた。

地面から、薄暗い人影が上り立つの感じ、レオンは振り向いた。4人の見覚えのある貌が、二人の前を立ちはだかる。

黒い装甲車型のロボットジーンに乗る、長いオレンジの髪の美女が笑って言った。

「この宇宙は我々のもの。邪魔する者は消去せよ、と、あの方がお

「つしゃられた」

「きみは、ヒューマノイド型アンドロイドのミーシャだね。かつて、天王星でモデルをしていた、」

「過去の話よ」

脇の3人はサイボーグもしくはサイボーグのエスパーの、黒髪で東洋人のジュンという天使族の少年と、体格のいいサイボーグで黒人のゾーイ、装甲車ロボットのジーンだった。

「きみたちはだまされている。次元の歪に隠した太陽と多くの人間たちをこちらの世界に返すんだ。でないと」

「どうすると？」

「この歪自体に宇宙全体がのみこまれ消滅する」

「それがどうかしたのか」

4人は攻撃波を送り、地面が亀裂し、レオンとルビーは犬となり、飛び去った。

まわりの住民が騒がないのは、どうやら二人のまわりの空間にまわりを遮断するシールドが張られているらしい。

「どうしよう、少佐？ 思念をとりこんで、破壊しますか？」

「いや、それでは軍に引き渡せない。それにシールド内とはいえ、あまりに騒ぎが大きくなると気づかれる恐れがある。ルビー、彼らを眠らせてくれないか？」

「、、やってみます。」

スピッツ犬になったルビーは、背からレーザービームを発射し、敵方と戦うドーベルマン犬となったレオンと目配せし、4体に向かって、強く念じた。

だが、その瞬間。

4体がどつと倒れたと同時に、ルビーの背に一筋の閃光が貫いた。それは右肩から腰にかけ一直線に引き裂いた。

「ルビー！」

青い液体が限りなく流れ、地面を濡らす。

人姿のレオンに抱きかかえられた少女は人型サイボーグに戻り、傷

を負い、気を失っていた。サイボーグとは言え、ヒューマノイドなので、痛覚がある分、失神してるだけ、まだ、ましだった。

「カマイタチの術にやられたね、あの4人に」

いつのまにか後ろに立つ、若者に、レオンは振り返る。

「きみは、、バラード・レイン、、」

「助っ人にきたぜ、バカ犬」

ブルートパースの輝く銀色のブレスレットをかざし、バラード・レインは、青い薔薇の如く微笑した。腰まで伸びた長い空色の髪とセルリアンブルーのアーモンド型の双眸が魔性のごとく煌めいた。

「駄犬だなあ、あいかかわらず、おまえって。俺が後ろから術を解放して、あいつらを縛ってやらなきゃ、おまえら、2人とも八つ裂きにされたたぜ。あの4体は、あのまま、俺の船で軍に引き渡そう。洗脳されてるのを解除しなきゃ。あとそのかわいいサイボーグ犬、、おやつ？」

バラードは血相変えて応急処置するレオンをしり目に、蒼白のルビーの貌を見るなり、「おい、シルバーに生き写しじゃねえか?!」と目を見張った。

「坊ちゃんはまだ生きてらっしゃるから、瓜二つというべきだろう? 気絶してるからいいものの、絶対に誰にも言つなよ。特にジュニア殿には黙っててくれ」

「なんで？」

「嫉妬深い方なのだ。これ以上左遷されたら困る」

「まあ、俺にとばつちりきても困るからな。ジュニア怒らせたら、怖いし、、」

紺青の軍服姿のバラードは、気絶した4体をESRシールドでぐるぐる巻きにしながら、沈鬱な表情でルビーの故障を処置するレオンを振り返った。

「おまえ、、代用品のつもりだったら、この子を傷つけるぞ。胆に銘じとけよ」

「代用品、、そんなつもりはない」

「絶対だな？」

「あたりまえだ」

珍しく真面目な表情のバラードに、レオンは驚き、心の奥にその言葉の意味を、深く刻みこむのだった。

座標軸 9 0 1 2 - 7

アズナブル中佐が消えた地点に3人は来ていた。

バラードの乗船してきた戦闘型宇宙船の舷窓外は、衛星エリスと惑星ソラが、1つの輪のように軌道に沿ってゆっくりと回転していた。「最初の飼い主に買われる前は、地球のペットショップ（奴隷市場）で売られていたらしい」

ジュピターのキース・ミハイロフ副刑務所所長にといあわせ、ルビーの経歴を教えてもらい、レオンは複雑な表情のまま、無の空間を見つめたいた。闇としか見えない暗黒の宇宙を。

ルビーは、天久保博士の研究施設で、修理され、ついでに左胸の傷も治してもらった。

「過去の傷なんてあっても仕方ないだろう？」

笑ったレオンに、涙ぐみ頷いて、喜んでいたのが印象に残る。

天久保博士は、「きみは、犬ではない」と、ルビーに言い残したという。

「バイオレット・アークという天使族が過去に存在した。彼女は双子を産んだ後、その子供1人とともに消息不明となった。そのうち1人は、ジュニア殿の妻、もう一人は消息不明だったと思われる子つまり、きみではないだろうか？」

「なぜ、私だと思われるのですか？」

「同じ顔だからだ。バイオレットと」

菫色の髪を持つ美しい女性と若き頃だろうと思われる天久保博士のフォトを、見せられたルビーは、あつと声をあげた。

「きみに、そっくりだろう？ 大学時代の私と、研究施設にいた実験

体の彼女との写真だよ」

「じゃ、あなたが私の父かも、」

「いや、彼女は、レッド・アーク博士と結ばれた。博士は法律を無視して、彼女と婚姻したが、世間には認められない結婚だった」

「でももう2人ともいないんですね」

「だが、きみたちには、未来があるじゃないか」

博士はそう告げた日の夜、何者かに惨殺され、翌朝発見されたのだ。レオンとルビーが旅立った後に。

「ジュニア夫人と姉妹だなんて、、ありえない」

困り顔のルビーに、レオンは同調し、

「証明できる証拠はないし、秘密を知る人は、殺されてしまっている」

と、進路を闇の空間に合わせた。

「どちらにしても、きみであることには変わらない」

バラードが割って入ってきた。

「おい、二人してのろける場合じゃないぜ。あと、6人いるんだぜ。その6人捕まえて、ボス倒して、あの中の純人間を解放して、それからこの穴ふさいで、帰らないと、全部、終わらないんだぜ」

「軍の方に要請して、ここに待機してもらおうよう手はずを整えた」

「、、、そうか。でも中にいくのは俺ら3人だけか」

「アズナブル中佐がいらっしゃれば、一緒に加わっていただく」

「アズナブル？」

「ハリー・アズナブル中佐だ。太陽系連合軍での私の上司立った方だ」

「強いのか？」

「最強のサイボーグエスパーだ」

「それは心強い。だが、もう、この世にはいないかもしれないんだぜ」

「私が言ってるのは、生きていれば、の話だ」

まわりの空間が小刻みに揺れ、振動で計器類が歪んで見える。振動

の速度が上がるにつれ、耳鳴りと悪寒が襲ってくる。次元が変わる瞬間だった。

スパークとともに、閃光と星々の無数の煌めきが目の前から降り注ぐ。

これは、おかしい。レオンはわが目を疑った。

私はサイボーグ人間ではない、はずだ。こんな幻覚や妄想が現れるはずがない。

宇宙船全体が旋回し、3人は一瞬、意識を失った。
だがー。

次の瞬間、壮大な視界が開かれた。辺り一面、緑の草原に。

風が彼ら3人をすくい取り、意識を闇からエメラルドの都、ナスカへと誘っていった。

はるか上空にそびえたつ、煌びやかな緑色の都市を。

「これは偽装都市だ。おそらく」

レオンが2人を振り返った。

「なぜなら天使たちにより創られた古代ナスカ都市は、去年の、太陽系連合調査局の報告では、反乱分子の天使族全員をこちらの次元に移送した後、連合軍により、すべて破壊消滅されているからだ」
金色の輝く髪を古代の風が通り抜け、青年の琥珀の瞳と端正な横顔を通りぬけていった。

偽装都市 ナスカ エメラルドの都 紀元前12000

宇宙船は、3人が、この世界に放り出される瞬間、前の次元に置いてきたようだ。

「おい、どうするんだよ、バカ犬のおっさん」

見た目と反比例して、バラードの悪口雑言はすさまじい。

「君の言葉づかいは、先輩に対して失礼にもほどがある。あとで、ジュニアに報告しておこう」

「ふん」

バラードは、草原に座り、じっと物思いにふける少女に目をやり、

薔薇色の長い髪にさわった。

「かわいいな。あいつも結婚しちゃったし、こっちにするか」

「おい、やめろ。ほんといいかげんなやつだな」

—このあいだ代用品はだめだと、人には言っておいて。

バードがクスツと笑ってレオンを振り返り、「ねえ」ともう一度ささやくと、ルビーがこちらをふりかえり、制した。

「しっ、中佐の思念を感じるわ」

「なに？」

「あそこに」

と、ルビーの真紅の双眸の先に、30代の青年が、岩場に腰かけていた。

キャメルのカウボーイハットを深めに被る、ダークブラウンのすりきたジーンズに白いシャツの青年は、3人に気づき、「やあ」と右手をあげた。

「レオン久しぶりだな」

深い緑色の双眸がいたずらっぽく笑っている。森の奥の神秘の色だ。

「アズナブル中佐殿」

「殿はいらんと何度いったらわかるんだ？ハリーでいい。タメ口で話そう。そちらの二人は、A-Z（ASTEROID BELT・ZERO）のバードと、かわいいお嬢さんだね？」

「ルビーです。スピッツのエスパークサイボーグ犬です。靈感を持ちます」

レオンが代わりに答えると、「ふうん」とハリー・アズナブルは感心したように、

「では、私がひきいる仲間たちの意識を完全に解放できるかね？暗示を解いて」と尋ねた。

「たぶんできると思います」

ルビーのしっかりとした返答に、ハリーは帽子を取り、会釈した。

「では、よろしく願う。私の手には追いきれんのでね」

取り去った帽子の下に現れたハリーの髪の色に、ルビーは一瞬、驚

いたふうだった。なぜかというそれは、爽やかな初夏の風を思わせる、草原の緑、そのものだったからだ。

アズナブル中佐は囚われた人間たち500人を解放し、自分の宇宙船に乗せ、ナスカの奥地にかくまっていた。

ルビーの解除脳力により、洗脳から解かれた彼らは、彼の宇宙船にある次元操作機によりその通路を開き、向こう側に待ち受ける太陽系連合軍に受け入れられた。

天にそびえたつ要塞に向け、小型機で、4人は向かった。

そこは、美しい緑色の建造物が立ち並ぶ、エメラルドグリーンの夢の都だった。

中央の城から、まるでまちわびていたかのように、一人の女が小型浮遊機で降り立ってきた。

天使のような微笑みを浮かべた彼女は、菫色の美しい髪と瞳を持つ、ある人と同じ面影の美女だった。

「あなたは、、、、」

「私は、バイオレット・アーク。あなたがたが来られるのをまちわびていました」レオンに向かい、彼女は手をさしのべ、握手を求めた。

握手を交わした彼は彼女に問うた。

「だがあなたは死んだはずでは」

「消息不明」死去という記録にされていただけです。私のデータを知る人々はすべて私が思念を下して、消去しました」

「天久保博士もですか？」

「そうです」

「なぜ、このようなことをなさるのです？」

「人類のため」

「人類？」

「近い将来人類は滅びます。私はその道を1つでなく、枝分かれさせ、救おうとしているだけです」

そのときだった。

背後から、銃口をむける人影に気づき、レオンは振り返った。

「中佐」

銃口から閃光がきらめき、董色の天使を射抜くと同時に、その姿が崩れ落ちた。まるで霧のごとく。

「幻想だ」

「幻想？」

さきほどのバイオレットは消え失せていた。

「未来に消え去った天使族の生き残りたちが残した、残像だ」

「残像、、、」

緑色の美しい荘厳な建造物に彼らは佇み、はるか地平の草原をみつめた。

「ではなぜ未来へとむかったのですか？」

西暦3088年5月 アルファ・ケンタウリの風

次元の境目は太陽系連合軍により閉じられた。すべての封印は解かれ、太陽は3つに揃った。もとの穏やかな宇宙にもどりつつあった。レオンは、アルファ・ケンタウリの第3惑星宇宙局庁の前にいた。

ハリー・アズナブルは、ナスカからもどってこなかった。彼の言葉をレオンは脳裏に思い出していた。

「どうして残像を消したのですか？」

「きみたちとわたしたちを取り込もうとしたから。彼ら天使たちは未来で新しい世界を築くつもりだ。私は数十人の仲間のサイボーグたちとともに彼らを追うつもりだ。

結局はなるようにしかない。ジュニアのやり方は正しいとは思えない。物事は1+1=2じゃないんだ。きちんと気持ちが割りきれぬもんじゃない」

「それで、天使たちがこの地で反旗を翻したと？」

「そうだ。レオン、俺はここから、仲間のサイボーグたちと未来に行く。逃げた天使達を追ってタイムワープするんだ」

バラード・レインとルビーは、すでに帰還する宇宙船に乗船してい

た。レオンは、アズナブル中佐を促した。

「なにおっしゃってるんですか！中佐、早く行きましょう。この次元が封鎖される前に脱出しないと」

「私は行かない」

人間の洗脳が解けた今、彼らをすべて、軍と連絡をとり、こちら側に無事に移送した。5人の敵は連合軍により制圧され、捕らえ、洗脳を解除された。天空に聳えるライムグリーンの宮殿から眼下を見下ろすハリー・アズナブルはレオンにダークジェイド暗い翡翠色の双ぼうを向けた。

別の自船Ⅱ宇宙船に乗りこみ、これから彼は違う場所へと旅立つのだ
「ジュニアは間違いをおかした。だが彼はきつと気がつくことはないだろう。君が遠い未来に私たちと出逢うことを夢見ている。」

ジュニアは武力を使わなかった。だが、形がちがうにせよ、とにかくの、『ちから』をもって全てを制する場合、必ずどこかしら歪みが生じるものだ。未来に行って私たちは戦うしかない」

「どこの時代に行かれるのですか？」

「それはまだわからん。天使たちが逃げた未来を捜すために、私たちは旅立つ。そこで、天使たちが風を起こすからだ」

「風？」

「風陣だ。レオン。天使たちは言っていた。いつか人類は滅びる。機械が人間を制する日がいつかは来るのだと。天使たちはそれを攪乱し人間に反乱を起こさせるつもりだ。私はその、戦いのきっかけを阻止するために行く。彼らは神ではない。歴史を翻弄するのを止めなければ。きみも行かないか？レオン」

「行けません、私は」

「そうか、、、残念だ。さらばだ。長生きしろよ。レオン」

アズナブル中佐は微笑み、他のサイボーグとともに、宇宙船に乗りこみ、空の彼方へと消えていった。

―この世に、絶対、という言葉は存在しないのかもしれない。

未来に逃亡した天使族反乱軍とサイボーグのアズナブル中佐の、ど

こちらが正しいのか、レオンにはわからなかった。

風はレオンの頬をなせた。まるで、彼の生きざまのように。

（マイナスを、いつか私たちはプラスに変えることのできる時代がくるのだろうか、）

青い夕闇がはるか彼方地平線へと消えていった。ケンタウルス座。アルファ星。その太陽は、地球のものとは別世界のもので、サファリアのごとく、深く蒼い海を想わせる異世界だった。

レオンハルトの長い戦いの日々のはじまりでもあった。

西暦3088・6・7

「レオンハルトが結婚したそうだ」

結婚記念日にレオンが、立体ホログラムを送ってきた。ブラックが、それをシルビアに見せてくれた。

薔薇色の髪と、紅い炎の如く双眸。それに対極敵な白い透けるような肌。スリムだが豊満なバストを持つ、真紅の薔薇のような美少女だった。

「すごく可愛い娘だね、レオン。面食いだっただ」

ブラックがじつとホログラムを見つめた後、シルビアにむかって言った。

「、、、やはり、あいつを退職させてよかった」

「よかったじゃん。これでレオンが幸せになれるんだし」

「もちろんそうだ、だが、そういう意味じゃない」

「、、、えっ？」

ブラックはホログラムをパチリと消すと

「なにか祝いの物を贈ってやらないと。なにがいいと思う？」

とあせってシルビアに尋ねてくる。他のことに気をまぎらわせるか

のごとく。

レオンの妻になった人があまりに可愛いからやきもちやいたんじゃないか？

まったくちがうぞ。

ブラックがものすごく恐い貌でシルビアを睨みつけた。

「おまえ、ほんとに天然だな。まだ、気がつかないのか？」

「わからない」

左手で頭をかかえたブラックは瑠璃の瞳を困惑させ、困った貌で、苦笑した。

「、、、まあ、こんどこそ、レオンが幸せになることを俺も真に願っている」

「あたりまえじゃない」

シルビアは、エメラルドのブレスレットから3Dネットのカタログを、拾い出し、映像を目の前に創り上げる。

「ほら、いろいろあるわ。二人を祝福してあげましょう。何がいかしら。でも公には、式をあげなかったのね。それって」

シルビアはエメラルドグリーンの大きくて綺麗な瞳を、ブラックに向け、ささやいた。

「やっぱりサイボーグ犬同士の結婚だからなの？」

レオンハルトの脳が人間だということを、まだ、彼女は知らされていないかった。

「、、、まあ、そうだな。だが、そんなことは二人にとってはどうでもいいんだろう。とても幸せそうじゃないか」

再びホログラムを映し出したブラックが、シルビアに微笑した。

「ほんとうね」

ホログラムには、プロキシマ・ケンタウリの第3惑星の桜並木の教会で、花吹雪の下。緋色の軍服の金髪青年と純白のウェディングドレス姿の薔薇色の髪の少女が抱擁し合い、キスしている映像までゆるやかに流れて行ったのだった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8273y/>

アルファケンタウリの風

2011年11月24日18時50分発行